

張風「賞楓図」(大和文華館蔵)についての一考察

都甲さやか (大和文華館)

大和文華館には、明末清初の上元(南京)で活躍した文人画家・張風(?~1662)の「賞楓図」(清・順治17年[1660])が所蔵される。本図は紙本墨画淡彩の軸装で、奔放な筆遣いと墨調の変化を活かして、懸崖に生える一本の楓樹を、ひとりの高士が見やる様を描く。1900年代初頭、富山の実業家である金山従革(1864~1936)の所蔵にあり、作品名は幾度かの変遷を経て現在の「賞楓図」となった。本図はこれまでに国内外の研究者によって、当時の文人画の主流に属さない個性的な絵画表現に加え、明朝遺民という画家の立場から主に注目され、張風の代表作として高い評価を得てきたが、いまだ本図に焦点をあてた詳細な作品研究は行われていない。本発表では、先学の研究成果を資としながら、まず本図の張風自題、付属資料、来歴等の基礎情報を整理し、更にその他の絵画作品との比較、文字史料の確認等を通して、本図の美術史的な位置付けと、本図を描くうえで画家にあった思いを考察したい。

張風の絵画学習については、「画無所師授、偶以己意為之(師に授かったのではなく、己が意のままに描いた)」(清・周亮工撰『読画録』)と伝わるが、実際には古画学習等も通して、自らの画風を形成した。また「山水図冊」(清・順治元年[1644]、メトロポリタン美術館蔵)に代表される、元末四大家や呉派を思わせる細緻な作、そして「携琴人物図巻」(同五年[1648]、虚白斎蔵)のような、浙派等に近づく奔放な筆遣いの作など、生涯を通じて、単一でない多彩な表現を用いていたとみられる。その背景として、当時張風の周辺で、「南北二宗論」における南宗画(文人画)／北宗画(職業画)の二項対立への批判が共有され、張風もまたそれに共感し、その具現として、いずれの画派ともみなしがたい画作を行っていた可能性を、文字史料の確認等を通して指摘したい。こうした考えは「賞楓図」の絵画表現にも、少なからず反映されていると思われる。

また本図と画家の遺民意識の関わりについては、既に先学に指摘されてきたが、それが絵画表現にいかに関わっているかは、未だ詳細な考察がなされていない。本発表では画面構成や画中モチーフに注目することで、その見解をより明らかなものにしたい。賞楓のテーマとして、清時代には杜牧の七言詩「山行」を絵画化した「楓林停車図」等が見いだせるが、本図はそれらの画面構成とは異なり、主に南宋院体画や浙派などで、眺望、観瀑などを描く際にしばしば用いられてきた定型構図を使うことで、高士が楓樹を見る姿をより劇的に表している。そして楓は古来、皇帝の居所を「楓宸」と呼ぶなど、宮廷のイメージと強く結びつく樹木でもある。したがって本図の懸崖の楓樹には明王朝のイメージが託されており、亡国を偲ぶ画家自身や同じ思いをもつ人々の姿が、高士に託されている可能性を述べたい。